

令和3年度 北信教育事務所・長野市教育委員会
合同指導主事研修会

特別活動学習指導案

指導者 北信教育事務所学校教育課主任指導主事 渋谷 孝信 先生
日時 令和3年4月28日（水） 第4校時
授業学級 1年C組（41名）
授業会場 武道場
題材名 「学級目標を決めよう！」
授業者 金箱 仁志

I 本校全体の研究

- | | | |
|---|-------------------------------|------|
| 1 | 目指す生徒の姿・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 1 |
| 2 | 全校研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 1 |
| 3 | 研究の重点・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 1 |
| 4 | 各教科等での育成を目指す資質・能力と各教科等の研究テーマ・ | 特活 2 |

II 特別活動の研究

- | | | |
|---|----------------------------|------|
| 1 | 特別活動の研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 3 |
| 2 | 教科としての全校研究テーマの受け止め・・・・・・・・ | 特活 3 |
| 3 | 研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 3 |

III 題材の指導計画

- | | | |
|---|--------------------------------|------|
| 1 | 題材名・学年・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 4 |
| 2 | 題材の目標・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 4 |
| 3 | 題材の評価規準・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 5 |
| 4 | 特別活動として全校研究テーマに迫るための仮説・・・・・・・・ | 特活 5 |
| 5 | 題材に寄せた教材化・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 5 |
| 6 | 題材展開・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 9 |

- | | | |
|----|--------------------|-------|
| IV | 資料・・・・・・・・・・・・・・・・ | 特活 11 |
|----|--------------------|-------|

信州大学教育学部附属長野中学校 特別活動

研究者 金箱 仁志 中村 満 高野 健人

I 本校全体の研究

1 目指す生徒の姿

学びを拓いていく生徒

2 全校研究テーマ

学びの本質に迫る学習の在り方

3 研究の重点

(1) 問題発見・解決の過程において、各教科等の「見方・考え方」を働かせることができるようにする。(重点1)

(2) 学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができるようにする。(重点2)

昨年度までの成果と課題から、本年度は、目指す生徒の姿を「学びを拓いていく生徒」とし、研究を進めていくこととした。「学びを拓いていく生徒」とは、①「各教科等の資質・能力を身に付けていく生徒」と②「①を踏まえて、身に付けた資質・能力を他に生かしたり、新たに見いだした課題を解決しようとしたりしながら学び続けていく生徒」と、捉えている。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説の第1章総説には、「これからの時代を生きる生徒は、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」と示されている。

このような力を育成するためには、中学校において、生徒が各教科等の「見方・考え方」を働かせて、各教科等の資質・能力の育成につなげていくことが求められている。「見方・考え方」そのものは資質・能力に含まれるものではないが、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、各教科等の学習と社会とをつなぐものである。また、本校では、学習の基盤となる資質・能力のうち、「問題発見・解決能力」が、生徒の生涯にわたる学びの基盤となるものと考え、研究の重点1を「問題発見・解決の過程において、各教科等の『見方・考え方』を働かせることができるようにする」と据えた。

各教科等で身に付けた資質・能力を他に生かしたり、新たに見いだした課題を解決しようとしたりしながら学び続けていくことができるようにするためには、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解するなど、生徒が各教科等の学習の有用性を認識していく必要がある。そこで、研究の重点2を「学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することができるようにする」と据えた。「学んだこと」だけではなく、「学んでいること」を付け加えたのは、単元や題材の学習において、「何のためにこの学習を行っているのか、そこにはどのようなおもしろさや社会とのつながりがあるのか」などを、生徒が自覚することで、学ぶことに興味や関心をもち、粘り強く取り組む中で、自己の学習を振り返って、次につなげるなど、生涯にわたって学び続けることにつながるのではないかと考えたためである。

各教科等の「見方・考え方」を働かせて、資質・能力を身に付けていくことが「各教科等の本質」であるとするならば、各教科等の枠を超えて、自ら「見方・考え方」を働かせて、物事を問い続けたり、追究したりして学び続けていくことを「学びの本質」と捉える。そこで、「学びを拓いていく生徒」を育成するために、全校研究テーマを「学びの本質に迫る学習の在り方」と据え、研究を進めていくこととした。

4 各教科等での育成を目指す資質・能力と各教科等の研究テーマ

各教科等の資質・能力を育成するため、本年度の各教科等の研究テーマを下記のように決め出した。

各教科等	各教科等で育成を目指す資質・能力	各教科等の研究テーマ
国語	国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力	文章を読んで理解したことなどに基づいて、自分の考えを形成する力を高める学習の在り方
社会	広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎	社会に見られる課題の解決に向けて公正に選択・判断する力を高める学習の在り方
数学	数学的に考える資質・能力	結果や解決の過程を振り返って考える力を高める学習の在り方
理科	自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力	観察、実験の結果を分析して、解釈する力を高める学習の在り方
音楽	生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力	感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり、音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりする力を高める学習の在り方
美術	生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力	主題を生み出し豊かに発想し構想を練る力を高める学習の在り方
保健体育	心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力	運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わおうとする力を高める学習の在り方
技術・家庭	よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力	社会や生活課題について多面的に検討し、最適な解決策を考える力を高める学習の在り方
英語	簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力	目的や場面、状況等に応じて、やり取りする力を高める学習の在り方
道徳	よりよく生きるための基盤となる道徳性	自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、道徳的心情を育むための学習の在り方
総合	よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力	問題解決的な活動を発展的に繰り返す力を高める学習の在り方
特別活動	様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して身に付ける資質・能力	学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決する力を高める学習の在り方

Ⅱ 特別活動の研究

1 特別活動の研究テーマ

学校生活をよりよくするための課題を見いだし、解決する力を高める学習の在り方

2 教科としての全校研究テーマの受け止め

「学級目標を決めよう！」（令和2年7月・1年）では、学級目標を決めるために、一人一人の考えから合意形成を図る学習を構想した。そこでは、学校目標「ともに学び、一人となる」の具体の姿を考えた後、自分たちが目指す姿を、中学校入学時に抱いた思いと関わらせて、話し合う展開を位置付けた。

T生（昨年度の1年D組の生徒）は、入学式で聞いた学校目標「ともに学び、一人となる」とは、「集団生活で協調性を学ぶ中で自分を主張したり、自分を認めてもらったりして、自信がもてる人になること。」と考えた。教師がその理由を聞くと、「一人ではできないことでも、多くの人の力でうまくいくし、集団の中で一人の人間となることが大切だから。」と答えた。そしてT生は、「そういう自分になるためには、よりよい集団であることが大切なので、学級として同じ方向に進みたい。みんなの思いも聞きたい。」と提案し、中学校入学時の思いを聞いた。T生は、将来の夢を語るA生、学校見学会で参観した附属中の授業や合唱に憧れて入学を希望したB生などの思いを聞き、友と共通する思いが、「夢」であることから、これを学級目標の中心と据えていくことを提案した。

多くの友が「夢」に賛同する中、D生は『『夢』を実現していくためには、より具体的な学級集団の姿も目標にあるとよい。』と考え、『『信頼・安心できる学級環境』が皆の考えに共通していたので、それも学級目標に入りたい。』と、提案した。その後、学級目標の言葉を決め出すために、T生は、上級生がどのように学級目標を決めたのかを知りたいと願い、休み時間に友と上級生の教室を訪れた。そこでは、昨年度の3年D組の生徒がD組という集団を大切にするために、学級の思いが込められている学級目標となっていることを知り、生徒は「D」という文字を使いたいと願った。そして「夢」と「信頼・安心できる環境」を関わらせて考えを出し合い、「**peace and dream**」（図1）を学級目標として決め出した。その後、学級目標を達成するための具体的な取組を月毎に決め、月末にその取組を振り返り、翌月の目標を決め出すようにしていった。このようなT生や昨年度の1年D組の生徒の姿を、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、学校生活をよりよくするための課題を見いだし、解決する力を高めた姿であると捉える。教師は、生徒が休み時間に上級生の学級を訪れることは、題材の手だてとして位置付けていなかったが、T生のように、様々な立場の人の思いを知ることで、合意形成を図る際の「自分の考え」の「根拠」となり、生徒が、学んでいることや学んだことの意味や価値を自覚することにつながると考えた。

上記の実践から見えてきた題材の展開を基に、本研究を構想する。



図1 D組の学級目標

3 研究内容

本研究では、学級目標を決めるために、一人一人の考えから合意形成を図る学習を構想する。そのためには、生徒が課題を自分事として捉え、「自分の考え」をもった上で話し合う必要がある。1学年の「学級目標を決めよう！」では、入学式などの学校行事や、生徒会オリエンテーションなどの生徒会活動を意図的に関連付けることで、生徒は、自分の「思い」に加えて、友、上級生、保護者、担任の「思い」などを知り、それらが「自分の考え」をもつための「根拠」となると考える。「自分の考え」をもって合意形成を図り、決まったことを実践し、振り返って次の課題解決に向かうことで、学校生活をよりよくするための課題を見いだし、解決する力を高めていくことができると考える。



図2 学校生活をよりよくするための課題を見いだし、解決する力を高めるための3年間の構想図

Ⅲ 題材の指導計画

1 題材名・学年 「学級目標を決めよう！」・1年

2 題材の目標 ※【 】内は、学習指導要領との関連を指している

(1) 知識及び技能 【(1)ア】

互いの考えや可能性を生かし合うことの大切さを理解し、話し合い活動の仕方を身に付けることができる。

(2) 思考力、判断力、表現力等 【(1)ア】

自分の「思い」と友、上級生、保護者、担任などの「思い」を整理し、学級や学校生活をよりよくするための課題を見いだし、異なる考えを認めながら、合意形成に向けて取り組むことができる。

(3) 学びに向かう力、人間性等

生活上の諸問題の解決や、協働し実践する活動を通して身に付けたことを生かし、学級や学校における人間関係をよりよく形成し、他者と協働しながら日常生活の向上を図ろうとする。

3 題材の評価規準

よりよい生活を築くための 知識・技能	集団や社会の形成者としての 思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係を よりよくしようとする態度
知 互いの考えや可能性を生かし合うことの大切さを理解し、話し合い活動の仕方を身に付けている。	思 自分の「思い」と友、上級生、保護者、担任などの「思い」を整理し、学校生活をよりよくするための課題を見だし、異なる考えを認めながら、合意形成に向けて取り組んでいる。	態 学級目標を踏まえて、具体目標に取り組もうとしている。

4 特別活動として全校研究テーマに迫るための仮説

(1) 重点 1 に関わる仮説

学校目標「ともに学び、一人となる」の具体の姿を考えた後、様々な人の「思い」をまとめた「附中の思い」を基に、「自分の考え」をもち、学級目標に込めたい願いを話し合う展開を位置付けることで、学級目標を決めるために、一人一人の考えから合意形成を図ることができ、その後の具体的な取組の実践につながる。

(2) 重点 2 に関わる仮説

中学校へ入学した当初に願った「自分が目指したい姿」に関わらせて、実践した具体的な取組の成果と課題を振り返る場を位置付けることで、様々な人の「思い」を再度自覚したり、「様々な人の『思い』」を基に、一人一人の考えから合意形成を図り、実践していること」の意味や価値を自覚したりすることができる。

5 題材に寄せた教材化

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別活動編では、学級活動（1）学級や学校における生活づくりへの参画において、「学級活動（1）における学習過程」（図 3）が例として挙げられており、まずは学級の「問題の発見・確認」から、この学習過程のサイクルが回り始めていく。

「問題の発見・確認」をしていくには、生徒自身が学級や学校における生活をよりよくするための諸問題を見付けていくことが必要となる。生徒が直面する学級の事象を「問題」として認識するためには、各学級で決め出した学級目標がその拠り所となると考える。

だからこそ、学級目標には、その学級の生徒一人一人の願いが込められている必要があり、学級目標を決めるために、合意形成を図る学習を行うことで、生徒にとっても、教師にとっても、学級目標が集団として目指すべき価値のあるものとして位置付けていく。

生徒が、学級目標を拠り所として、「①問題の発見・確認」をすることができれば、「願いの込められた価値ある学級目標」を具現させていくために、どのように問題を解決していけばいいのか、「②解決方法等の話し合い」をする必要感が生まれ、よりよい生活をつくるための問題の原因や具体的な解決方法、役割分担などについて話し合うだろう。そして、話し合い活動で具体化された解決方法について合意形成を図り、「③解決方法の決定」をしていく。例えば、学級で具体的に取り組む内容を決め出したり、意識の向上を図るような掲示物を作成したりすることが提案として挙げられるだろう。そして生徒が、決定した解決方法や活動内容など「④決めたことの実践」を行った後、教師は、決めたことの実践を「⑤振り返る」場面を設ける。実践を定期的に振り返ることで、生徒は、学級目標を具現させようとしていく意識化を図るとともに、結果を分析し、新たな問題を発見・確認し、次の「学級活動（1）における学習過程」を回すサイクルへとつなげて

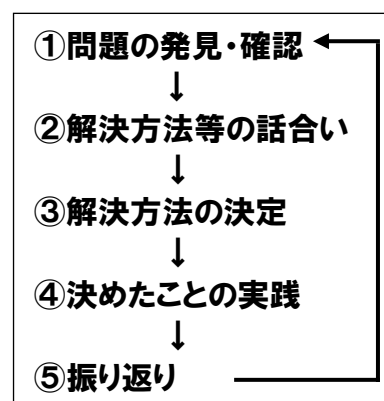


図 3 学級活動（1）における学習過程

いくだろう。

このように、一人一人の願いが込められた学級目標を決め出し、その学級目標を意識した実践と振り返りを繰り返していくことで、学校生活をよりよくするための課題を見だし、解決する力を高めていくことができるのではないかと考える。

(1) 学校目標「ともに学び、一人となる」の具体の姿を考えた後、様々な人の「思い」をまとめた「附中の思い」を基に、「自分の考え」をもち、学級目標に込めたい願いを話し合う展開を位置付ける

登校初日、生徒は、入学式で、学校目標「ともに学び、一人となる」について触れた様々な立場の人物からの挨拶を聞き、心新たに中学校生活を始めていこうとするだろう。教師は、入学式後の短学活において、学校目標や入学式での挨拶の内容に触れ、学校生活において大切にしたいことを伝え、一日の振り返りを生活記録（本校の生活記録は「一人となる」という名称で呼ばれている）に書いてくるように伝える。本校の矜持として、「戸隠しょうまの心」（図4）があり、「一人となる」の表紙には、戸隠しょうまの写真がある。生徒は、帰宅後、生活記録を開くと、そこに印刷されている坂村真民さんの揮毫の書に気付くだろう（図5）。生徒はこの詩を目にし、これは、副校長が入学式の挨拶で曲を流しながら紹介していた、過去に附属中の送別音楽会で歌った曲だということを想起するだろう。生徒は改めて附属中に入学した時の「思い」を、学校目標や「二度とない人生だから」の詩に関連付けて、自分なりの具体の姿として生活記録に書くだろう。

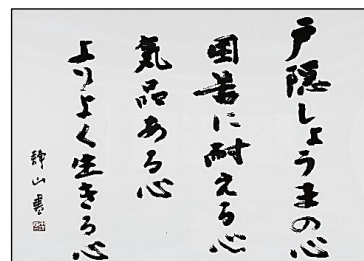


図4 「戸隠しょうまの心」

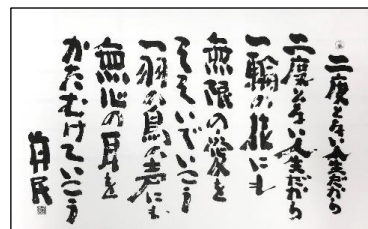


図5 坂村真民さんの揮毫の書

第1時、教師は、「附属中生になって」というテーマで作文にまとめるように促し、生徒は、附属中学校に入学したことを振り返り、これからの決意を書く。

生徒会の生活オリエンテーションにおいて、生徒は、上級生から学校生活における説明を受け、附属中では「気品」を大切にしていることを知る。「気品」とは、「自分たちでは気付かないもの。当たり前の中生活の中でできること（できる姿）を見た人がその人に魅了されるもの。そして、その気持ちが伝統となり、受け継がれていくもの。」と、本校では定義している。その具体の姿の一つとして、上級生が校歌を歌ったり、応援を行ったりして、生徒に紹介する。生徒は、合唱や応援に取り組む上級生の姿を見て、伝統として引き継がれているものの中にある上級生の「思い」に触れ、今後の生活の中で大切にしたいと願うだろう。

その日の午後の短学活で、教師は、1日を終えた感想を尋ねる。多くの生徒が、上級生の姿を目の当たりにして、上級生の凜とした姿に憧れを抱くとともに、1年後に上級生のようになることができるのか不安に思う生徒もいるだろう。そのような生徒に対し、教師は、上級生のような姿になるためには、どうすればよいか尋ねる。そして「自分の願いや思いを実現させたり、上級生のような姿になったりしていくためには、学級としてそれを実現する環境であることが大切である。」といった生徒の考えを取り上げ、次の学活から扱う題材の議題「学級目標を決めよう！」を提案する。

第2～3時、教師は、生徒が様々な立場の人の「思い」について触れて書いた生活記録を紹介し、上級生も、たくさんの人に支えられてきたことを確認する。そこで、教師は、自分や友の「思い」に加えて様々な立場の人の「思い」があったことを確認し、それらを「附中の思い」（図6）に整理していくことを提案する。生徒は第1時に書いた作文を見返し、自分の「思い」を書いていく（図6①）。教師は、入学式では校長先生の式

(友)の思い 友だちのAくんは、学校見学会に来て、合唱や授業を見て、附属中を受験することを決めたようだ。Bくんも将来は医者になりたいという夢があることが分かった。	(友)の思い 新入生代表の1くんは、コロナ禍でも、感謝と工夫など前向きに捉えていた。「ともに学び」にも触れ、仲間と考え、議論し、励まし合いながら、自分の生き方を考え、決めていく力を付けていきたいとあった。	(友)の思い 学級長に立候補したCくんは、その思いを語ってくれた。仲のよいクラスを目指していきたいことを言ってくれていた。普段の学校生活の中でも、友達に気遣う場面があり、優しく接してくれる。	自分の考え ・「挑戦」 3 班の人の考え ・「探究心」・「憧れ」 ・「仲良く」・「挑戦」 みんなの考え ・「夢」・「メリハリ」 ・「居心地のよさ」
(保護者の方)の思い 2 コロナ禍での生活があるからこそ、「私たちはできる」「変えていける」という自信をもつことが大切で、私たちの中にはそういった力があること大事にしてほしいという思いが伝わってきた。	自分の思い 1 私は、これからクラスの人と仲良くなり、学習に取り組むことはもちろん、規則正しい生活を送り、一人の附中生として恥じないようにして、自分の夢を実現させていきたい。	(上級生)の思い 私たちの生活について、教えてくれた2年生の先輩が本当にすごい。一人一人が自分の言葉で自信をもって話していた。1年後にあのような姿になることができるのか、とても不安がある。	自分の考え ・Challenge Comfortable 4 班の人の考え みんなの考え
(校長先生)の思い 2 共創では、チームの考えが一致しないときに共通点を探り、合意形成を目指すことが必要で高い志をもち、友と積極的に共に学んでいくことで「一人」となっていくってほしいことがあり、「ともに学び」に、多くの願いが込められていると思った。	(副校長先生)の思い 入学式でお話していただいた「二度とない人生だから」の歌詞が「一人となる」の表紙の裏にあった。出会いを大切に、自分なりの生き方を探求していきたい。	(金箱先生)の思い 2 担任の先生は「主人公になる」「探究心」「思いやり」を大切にしてほしいと言っていた。自分も友も大切に未来を切り拓いてほしいという思いがあることを伝えてくれた。	

図6 「附中の思い」(例)

辞、新入生代表の挨拶、保護者代表の挨拶、副校長先生の入学心得にも様々な「思い」が込められていたことを振り返るように促す(図6[2])。その際、資料(特活11)を提示し、当時の話の内容を想起できるようにする。

第4時(本時)、前時の終末に、学級目標に込めたい願いを基に、学級目標の具体的な言葉を決めていきたいと願った生徒の振り返りから、議題『附中の思い』を基に、学級目標に込めたい願いを決め出そう。」を据える。

教師は、様々な立場の人の「思い」から、学級目標にどのような願いを込めたいか、「自分の考え」を「附中の思い」に書くように促す(図6[3])。その後、4人グループでどのような願いを込めたいかを話し合う場を設ける。教師は、話し合いを行う際には、友がどのような内容を、どのような思いから言いたいのかを理解しようとしながら聞くなど、互いの考えを生かし合うことの大切さを伝え、グループ毎に学級目標に込めたい願いをホワイトボード(図7)にまとめていくように促す。生徒は「自分の考え」を述べる際に、「附中の思い」に書かれている「自分の思い」「担任の思い」「上級生の思い」などを根拠としながら、学級目標に込めたい願いを伝え合い、まとめていくだろう。

B 班

「探究心」「憧れ」

「仲良く」「挑戦」

図7 ホワイトボード(例)

教師は、各班のホワイトボードを黒板に提示し、様々な願いがあることを確認した後、どのように学級として込めたい願いを決め出していけばよいか生徒に尋ねる。生徒は、小学校で、学級目標を決め出した経験を想起し、同じような願いを表すものはひとくくりにしてまとめていけばよいなどと答えるだろう。そこで、教師は、各班のホワイトボードにある学級目標に込めたい願いとして共通するもの同士をまとめていくように促す。教師は、生徒の考えに対して、問い返ししながら、生徒が学級目標に込めたい願いを導き出した根拠を引き出すようにしていく。生徒は、前時までにまとめた「附中の思い」にある、友の「思い」や副校長先生の「思い」などと、これまでの中学校生活における自分の体験とを結び付けながら、「自分の考え」を述べていくだろう。教師はこ

のような考えを受け、黒板にそれぞれの願いをひとくくりにまとめたり、生徒が述べた根拠や生徒の体験などを板書したりしていく。教師は、生徒とともに、学級目標に込めたい願いを少しずつ絞っていき、最終的に三つから四つに絞っていくことを目指すが、無理に絞ることはせず、学級目標に込めたい願いとして、次時へつなげていく。

第5時、議題「41 人の願いが込められた学級目標の候補となる言葉を決め出そう。」を据え、第4時に絞った願いを基に、具体的な言葉を考えていくようにする（図6④）。個人では様々な考えが出されることが予想されるが、班や学級で話し合う際には、どのような言葉がよいのか、結論を出すことは難しいだろう。そこで、教師は、授業の終末に、上級生の学級目標はどのような言葉になっているのか、調べてみることを提案し、短学活の時間に生徒会オリエンテーションで説明をしてくれた姉妹学級である2年C組に行き、教室に掲示されている学級目標（図8）を見たり、グループ毎に学級目標に込められた思いと、どのようにしてこの言葉になったのかをインタビューしたりする機会を設定する。生徒は上級生の話を聞いた後、それぞれ聞き取った内容を学級で伝え合い、

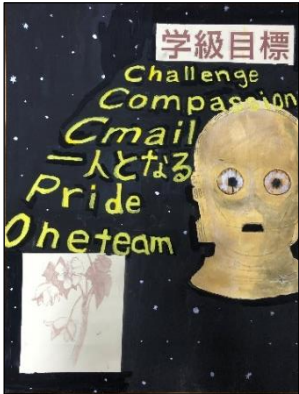


図8 2年C組の学級目標

次時にもう一度、学級目標について話し合うことで、生徒の願いが込められた学級目標の言葉を決め出していくことができるだろう。

表1 「取り組みチェック表」(例)

	月曜日		火曜日		水曜日		木曜日		金曜日	
	挨拶	時間	挨拶	時間	挨拶	時間	挨拶	時間	挨拶	時間
1班	◎	○	○	○						
2班	○	△	○	○						
3班	◎	◎	○	◎						
4班	△	○	◎	◎						
5班	○	◎	△	◎						
6班	△	△	○	○						
7班	○	○	△	○						
8班	○	△	○	○						

第6時、教師は、まずは何を重点的に取り組んでいくとよさそうか尋ねる。生徒は、学習オリエンテーションの内容を思い出し、「挨拶」「時間」を挙げるだろう。教師は、「挨拶」や「時間」に関して、

どのような取組をしていけばよさそうか、班ごとに考える場を設ける。生徒は、表を作り（表1）、確認していくことなどを提案するだろう。

そして、後日、具体目標への取組の振り返りを行い、成果と課題を友と話し合う場面を設ける。生徒は、話合いを繰り返し、学校生活をよりよくするための課題を見だし、解決する力を高めていくだろう。

以上のような題材を展開することで、生徒は「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決する力を高めていくことができるのではないかと考える。

(2) 中学校へ入学した当初に願った「自分が目指したい姿」に関わらせて、学級目標を具現するために実践した具体的な取組の成果と課題を振り返る場を位置付ける

教師は、生徒とともに、学級目標と具体的な取組を決め出し、実践を行った後、中学校へ入学した当初に願った「自分が目指したい姿」に関わらせて、実践した具体的な取組の成果と課題を振り返る場を位置付ける。生徒は、入学当初に多くの人から聞いた学校目標「ともに学び、一人となる」の具体の姿や憧れを抱いた上級生の姿と関わらせて、現在の自分の姿や学級としての姿を見返していくだろう。さらに、様々な人の「思い」を基に、学級目標に込めたい願いを決め出したり、学級目標の言葉を決め出したりしたことを想起するだろう。教師は、このような考えを全体に紹介し合うようにすることで、生徒は、様々な人の「思い」を再度自覚したり、「様々な人の『思い』」を基に、一人一人の考えから合意形成を図り、実践していること」の意味や価値を自覚したりすることができる。と考える。

6 題材展開 学級目標を決めるために、一人一人の考えから合意形成を図る学習

全7時間扱い 本時は第4時

段階	◆学習		評価の観点	時間
	教師の指導・支援	予想される生徒の反応		
導入	◆中学校入学に寄せた、様々な立場の人の「思い」を知り、学級目標を作ることへの願いをもつ。			入学式
	・入学式前の学活で、担当の職員が、入学式の流れや所作などを確認する。	ア 校長先生の式辞、新入生代表の挨拶、保護者代表の挨拶、副校長先生の入学心得では、それぞれの立場から、学校目標「ともに学び、一人となる」について触れた話をしてくれたり、私たちに自信をもつことを伝えてくれたりした。私は、これからの中学校生活をがんばろうという気持ちになった。		入学式
	・入学式後の短学活において、担任としての願いを伝える。	イ 先生は「主人公になる」「探究心」「思いやり」を大切にしてほしいと言っていた。自分の手で、未来を切り拓いてほしいという願いが伝わってきて、私も共感することができた。		短学活
	・1日目の感想を生活記録に書くことを伝える。	ウ 私は「ともに学び、一人となる」は、「友と協力することで、新しい考えを得ていくこと」だと思う。		短学活
	・ウのような生活記録を紹介し、「ともに学び、一人となる」とはどのような姿か、その理由とともに話すように促す。	エ 「一人となる」は卒業後のイメージなので、中学校では「ともに学ぶ」が大切なんだと思う。一人ではできないことでも、集団の中にいるからこそ、できるようになることもあると思う。私には将来の夢があって、それを実現させていくためには、いろいろな人の考えを知ることが大切だと思う。		短学活
	・エのような反応から、一人一人はどのような「思い」をもって附属中学校に入学してきたのかを伝え合った後、作文を書く場を設ける。	オ Aさんは、学校見学会に来て、先輩方の合唱を聞いたり、授業に向かう姿勢を見たりして、憧れをもち、受検をしたようだ。私だけではなく、みんなそれぞれの思いがあるからこそ、それを実現することができるクラスでありたい。		1
展開	・上級生も同じ気持ちで入学して現在に至ることを伝え、入会式やオリエンテーションでは、1年後の自分たちと重ねて上級生の姿を見えるように伝え、振り返りを行う。	カ 生徒会長の話から、附属中では、学友会と呼ぶ理由が分かった。私も自ら考えて行動できるようになっていきたい。 キ 3年生の合唱や応援には圧倒された。伝統として引き継がれてきた思いが込もっていて、私もあの先輩のようになりたいけれど、1年後にあのような姿になれるのか、不安もある。		生徒会活動
	・オやキのような反応から、学級として目指す姿を共有するために、学級目標を作ること提案し、生徒の賛同を得て、 題材の議題：「学級目標を決めよう。」 を設定する。	ク 小学校のときも学級目標があって、それを合言葉のようにしていたので、学級目標を作るのはよいと思う。教室には、学校目標「ともに学び、一人となる」があるが、まずは2年生のような先輩の姿を目指し、その思いや姿を引き継げるような、私たちらしい学級目標を作りたい。		短学活
	◆学級目標を決めるために、学級で話し合っ合意形成を図る。			
	・クのような反応から、上級生もはじめてできていたわけではなく、たくさんの人に支えられて、現在の姿になっていることを伝え、これまでの学校生活を振り返り、自分や友の「思い」に加え、様々な立場の人の「思い」があったことを想起し、ワークシートにまとめる場を設ける。	ケ 入学式では様々な立場の人の挨拶があったが、そこにもそれぞれの思いが込められていた。あの時は緊張で、あまり聞き取れなかったの、挨拶の内容などをもう一度見返してみたい。 コ 先輩方は私たちが学活をしている最中も、外でずっと応援練習や合唱練習をしてくれていた。6年生の時に児童会をやっていたので少し想像できるが、生徒会オリエンテーションを行うために、知らないところで準備をしてくれていたのだと思う。 サ こうしてワークシートにまとめてみると、たくさんの人の様々な思いが見えてくる。これらを踏まえて、学級目標にどのような願いを込めていけばよいだろうか。		2
	・友と互いのワークシートを読み合う場を設ける。	シ 同じ「校長先生の思い」でも、それぞれで捉え方が違った。「附中の思い」を基に、41人の思いが込もった目標にしたい。		
	・シのような反応から、 議題：「学級目標に込めたい願いを決めよう。」 と据え、「附中の思い」を基に、「自分の考え」を書く場を設ける。	ス 学校目標「ともに学び、一人となる」に関する校長先生や友の考え、金箱先生の思いから「協力」「思いやり」を学級目標に込めたい。隣の席のCさんの、「メリハリ」という考えにも共感できる。他の皆は何と考えたのだろう。	10分	

展 開	・スのような反応から、4人グループごとに、考えたことについて意見交換するように促す。 ・班で出された「願い」をホワイトボードに書き出すように促す。	セ Dさんは、金箱先生が言っていた「探求心」を大事にしたいと言っていた。「探求心」は学習オリエンテーションで別の先生が話していた「学びを拓いていく生徒」とも関わる。 ソ Eさんは、先輩の姿から、「憧れ」を挙げていた。私たちが先輩に憧れているように、私たちも「憧れ」を抱いてもらえるような存在になりたい。 タ Fさんは学級長に立候補したBさんの思いを大切に「仲良く」を挙げていた。学級長に立候補するのは勇気のいることだし、私も、仲の良いクラスだからこそ、いろいろなことにチャレンジできるのではないかなと思う。そういう意味で私は「挑戦」という思いを込めたい。	30分	思 (観察・ワークシート)	1 (本時)	
	・タのような反応から、班で挙げられた「願い」が書かれたホワイトボードを黒板に掲示し、その「願い」がどのような「思い」から出されたのか理由を問い返す。	チ 私たちの班では、「探求心」「憧れ」「仲良く」「挑戦」という願いが挙げられたが他の班では、どのような願いが挙げられたのだろうか。 ツ Gさんの班からは、「夢」という願いが出されていた。それは、私たちは一人一人何かしらの理由をもって附属中学校に来ているが、そこに共通していることが夢だと言っていた。「挑戦」という願いも、「夢」に含まれると思うので、こうした共通点を探っていけば絞れるのではないかな。	10分			
	・本時の振り返りをワークシートに書くように促し、ツのような振り返りを全体に発表するように促す。	テ 今日は学級目標に込めたい願いについて、班で話し合った。「夢」「メリハリ」「居心地のよさ」が願いとして挙げられたが、それぞれ、いろいろな人の思いを根拠にして「自分の考え」を述べていて、改めて私たちは自分たちだけの力で生活しているのではなく、多くの人に支えられていることを実感した。だからこそ、私たちの願いが込められた学級目標にしていきたい。				
		・テのような反応から、議題:「41人の願いが込められた学級目標の候補となる言葉を決めよう。」を据え、学級目標の言葉を考えるように促す。	ト 学級目標に込めたい願いである「夢」「メリハリ」「居心地のよさ」から、言葉としては「団結」「One for all, All for One」「Smile」「たんぼぼ」など様々な候補が挙がったが、まとまらなかった。先輩方はどのような学級目標にしているのかを参考にすれば、よい言葉が思い浮かぶかもしれない。			
・トのような反応から、休み時間に上級生の教室へ行き、どのような学級目標を掲げているのを見たり、可能であれば、上級生にその意味を尋ねたりするように促す。		ナ オリエンテーションや生活指導でお世話になった2年C組の学級目標は、「Challenge, Compassion, Cmail...」など、2年C組の「C」の文字を使っていた。理由を聞いてみると、C組らしい学級目標にしたかったことと、色々な考えの共通点を探っていったら、このような言葉が出てきたようだ。			短学活	
・上級生の学級目標について、報告し合った後、再度、学級目標として据える言葉を検討するように促す。		ニ 「団結」「One for all, All for One」「Smile」「たんぼぼ」の基となっている願いは同じであるから、どれもよいかもしれないが、C組らしい言葉としては、どれがよいだろうか。それぞれの言葉のよさを出し合った上で、どうするか考えよう。		思 (ワークシート)	1	
・ニのような反応から、議題:「学級目標に迫るための具体的な実践目標を決めよう。」を据える。		ヌ 「たんぼぼ」は、多くの花が集まって、力強くきれいに咲いていることから、友は、「たんぼぼ」には他の三つの言葉の願いも含まれていると考えてくれた。この考えに多くの友が賛成し、学級目標を「たんぼぼ」に決めることができた。		思 (ワークシート)	1	
終 末	◆具体的な取組を振り返り、成果と課題を明らかにする。 ・中学校へ入学した当初に願った「自分が目指したい姿」に関わらせて、学級目標を具現するために実践した具体的な取組の成果と課題を振り返る場を位置付ける。		ネ 私は中学校へ入学してきたときには、2年生の先輩のようになりたいと思っていたが、「挨拶」や「時間」のどちらも、ただやっているだけのような気がする。形ではなく、様々な人々の「思い」を大切に決めて学級目標や具体的な取組だからこそ、「挨拶」一つを大事にして2年生の先輩に近付きたい。		思 (観察・ワークシート)	短学活

IV 資料

(1) 入学式 学校長式辞 校長 茅野 公穂 先生 一部抜粋

近年、独創とともに共創が重要になっています。独創と共創。どんな漢字を思い浮かべましたか。独創的なアイデアなど、一人で創るという独創と、チームで何かを成し遂げる共に創るという共創です。共に創るという共創が重要になってきているのは、多様な専門性など、それぞれの強みや持ち味を備えた人からなるチームでないと、対処、解決、目標達成できないことが、急速に増えているからです。共に創るという共創ではそれぞれの強みや持ち味を、よりよく発揮すること。そのためにメンバーそれぞれの強みや持ち味を互いに認め合っていることが重要です。また、共創では、チームの考えが一致しないときに共通点を粘り強く探り、合意形成を目指すことも求められます。皆さんが附属長野中学校生として高い志をもち、ここに集う友と積極的に共に学び、頑張る友を認め、互いに応援できる仲間となるとともに、切磋琢磨し、皆さんそれぞれ強みや持ち味を広げ、深め、粘り強さを備えた「一人となる」ことを期待します。

(2) 入学式 新入生代表挨拶 一部抜粋

私たちは、各小学校で、特に最後の1年間、いろいろな思いを抱えて過ごしてきました。我慢しなければいけないこともたくさんありました。しかし、私たちが経験した1年は、毎日支えてくれる周りの人たちの思いが、より一層あふれた1年でもありました。各学校で感じてきた感謝と工夫は、私たちだけが得た大切な力だと思います。この気持ちを忘れずに、信州大学教育学部附属長野中学校の3年間で大切に過ごしていきたいと思います。そして、学校目標の「ともに学び、一人となる」を聞いて、私は、小学校の時から考えた中村哲さんのことを思い出しました。中村さんは医師でしたが、アフガニスタンで白衣を脱ぎ、重機を動かし、用水路を引きました。それを自分の生き方としていました。私たちも、今日入学した仲間たちと考え、議論し、励まし合いながら、自分の生き方を考え、決めていく力を身に付けていきたいと思っています。

(3) 新入生保護者代表挨拶 一部抜粋

今日は皆さんに、皆さんの中にある力についてお話したいと思います。昨年度は休校や活動の制限など、思いもよらないことが起こりました。修学旅行や学校行事の中止、縮小へのやるせない気持ち、憤り、悲しみ、様々な思いをもったことでしょう。その中でも皆さんはしなやかに、そして力強く、毎日に向き合いました。できないことに文句を言うのではなく、何ができるかを前向きに考え、精一杯行動しました。ここにいる一人一人がすばらしい1年間を送ったと、私は確信しています。この1年で、生きる力、そして何かを変えていく力が、皆さんの中に大きく育ったと思います。「私たちはできる」「変えていける」、そんな自信も生まれたことでしょう。ですから皆さんが考え、悩んで出した答えは、私たち大人が用意した、ありきたりな答えよりずっと価値のあるものです。私たち大人ができることは皆さんに正しい答えを用意することではなく、皆さんが悩んだり迷ったりすることを邪魔せず、そばで支えることです。だから新入生の皆さん、悩んだり失敗したりしても大丈夫。自分がたどりついた答えを信じて、自信をもって進んでください。

(4) 入学式 入学心得 副校長 畑 邦弘 先生 一部抜粋

新入生の皆さんは、自ら選び、そして、本校に選ばれ、今日から伝統ある附属長野中学校の生徒となりました。そんな皆さんに私からの課題を送り、入学心得としたいと思います。では、聴いてください。

～合唱曲「二度とない人生だから」を流す～

この合唱は、平成20年度の本校の送別音楽会で歌った、坂村真民さんの作詞した「二度とない人生だから」です。

1学年の生徒昇降口に平成8年度卒業生が、卒業記念品として本校に残してくれた、坂村真民さん揮毫の書が掲示されています。毎日目にすると思います。

小さな出会いに足を止めてみてください。出会いは人ばかりではなく、学びの発見であったり、自分自身の成長であったり、悩みであったり、草花のふとした表情や足元の小さな虫たちであったりします。それらとの「めぐりあいのふしぎ」を感じられる人でいてください。どうかいつまでも、そんな自分を見失わないでください。

新入生の皆さん一人一人が、「二度とない人生だから」に続く、自分の生き方を探求する中学校生活であることを願っています。